左京二条三坊・三条三坊の調査

―第173-1次

1　はじめに

橿原市からの委託事業として、農業用水路改修工事にともなう発掘調査を実施した。今年度は３ヵ年計画の２年目であり、対象地は橿原市法花寺町で藤原京左京二条三坊・三条三坊にあたる。

工事区域が総長115.8mであるため、余掘り2.5m分を含め、調査区は長さ118.3m、幅2.5～3.0mで設定した。

当調査区付近は藤原京東二坊大路の推定地にあたり、その東側溝の推定位置が本調査区内に想定されることから、東西に数カ所の拡張区を設け、平面での遺構検出をおこなうことにした。調査は北区と南区に分けて進めた。

全体の調査面積は、約356㎡である。調査期間は2012年11月１日から12月11日までである。

2　検出遺構

調査区の基本層序は、上から表土、耕土、旧水路堆積土、地山（黄橙色砂礫、黄褐色粘質土、明黄褐色粘質土）の順である。古代および古墳時代の遺構は、地山面で検出した。

調査区の大部分が現代の水路と重複し、ほぼ全域で遺構面が失われていたため、遺構検出は主に調査区壁面でおこなった。ただし、北区南半および南区南半では、一部で古代の遺構面を平面検出することができた。

検出遺構は以下の通りである。

南北溝SD11140　北区南端から20m北側に設置した拡張区２（東西0.9m×南北２m）で検出した、南北方向の素掘り溝である。検出した長さは２m、幅は0.9m、深さ40㎝である。西側の肩は確認できたが、東側の肩は拡張区内では確認できなかった。埋土の茶灰色粗砂からは、古代の土器が出土した。

南北溝SD11141　南区の拡張区３付近においても、南北溝を長さ20mにわたり平面的に検出した。検出した幅は0.8m、深さは最大で20㎝である。西側の肩は確認することができたが、東側の肩は現在の水路に削平されたと考えられる。埋土の茶灰色粗砂・茶灰色粘砂から古代の土器が出土した。北区で検出した南北溝SD11140と、南北の主軸がほぼ一致すること、また埋土の特徴も類似

図140　第173-1次調査区位置図　1：4000

し、出土遺物の時期からみても矛盾はないことから、一連の溝とみられる。

土坑SK11135　北区北端の東壁で検出した土坑である。検出面で径１m以上あるが、埋土を50㎝掘り下げると土坑の径は0.5mとなり、深さが1.3m以上あることから（底未検出）、素掘りの井戸の可能性も考えられる。出土遺物から古墳時代の遺構とみられる。

土坑SK11136　北区北端から28m南方の西壁で検出した土坑である。径0.6m、深さ１mであり、埋土からは古墳時代前期の土器類および石材が出土した。石材は、土坑が半分程度埋まった段階で、土器とともに埋められていた。

土坑SK11137　南北溝SD11140の下層で検出した土坑である。径0.7m、深さ80㎝であり、埋土から古墳時代前期の土器類が出土した。

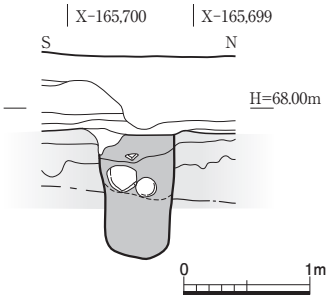
土坑SK11138　土坑SK11137の南西約2.4mの位置で検出した土坑である。径0.76m、深さ50㎝であり、埋土から土器片が少量出土した。

3　出土遺物

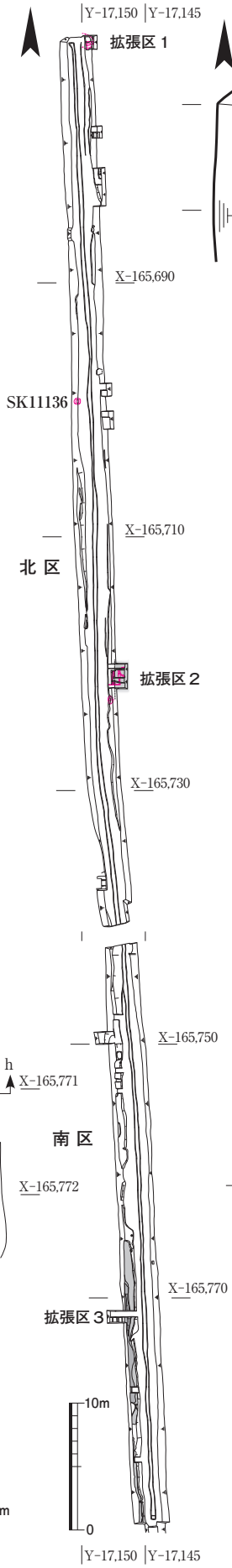
土　器　土器類は整理箱で５箱出土している。古墳時代の土師器と古代の土師器・須恵器が主である。この他、現水路の堆積土より、中世から近現代に至るまでの陶磁器類も出土した。

１・５・６は南北溝SD11141、２～４は南北溝SD11140から出土した。１は土師器の杯である。口径18.4㎝、残存高3.9㎝。外面の体部下半はケズリで調整されている。藤原宮東面内濠SD2300出土資料にも同様の一群がみられ、杯ＺＩとされている（『紀要 2012』）。２は口径14.0㎝の製塩土器である。３・４・５は須恵器の杯

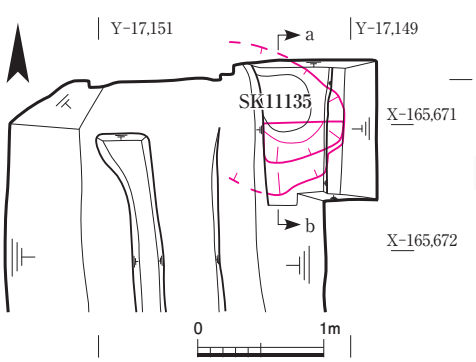
SK11136検出状況（東から）



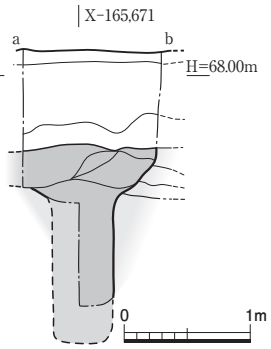
SK11136断面図　1：60



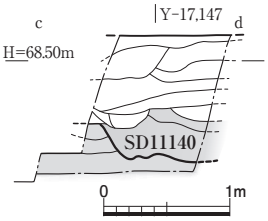
調査区遺構図　1：500



拡張区１遺構図　1：60

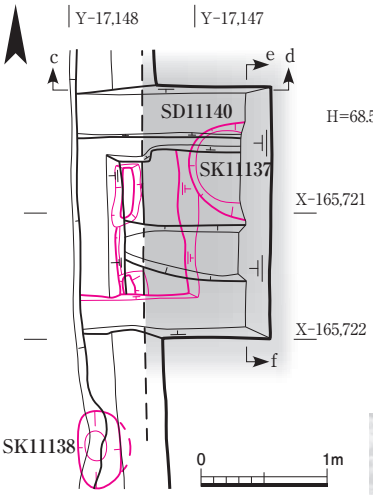


SK11135断面図　1：60

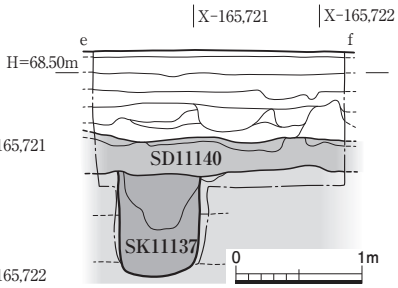


SD11140断面図　1：60

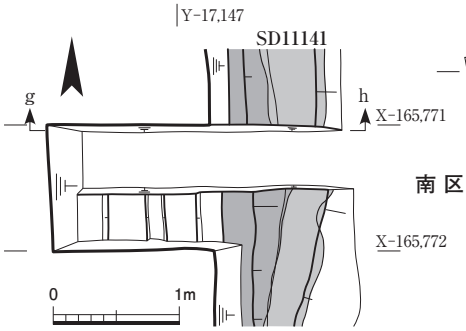
SD11140検出状況（西から）



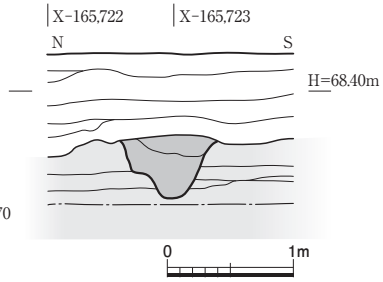
拡張区２遺構図　1：60



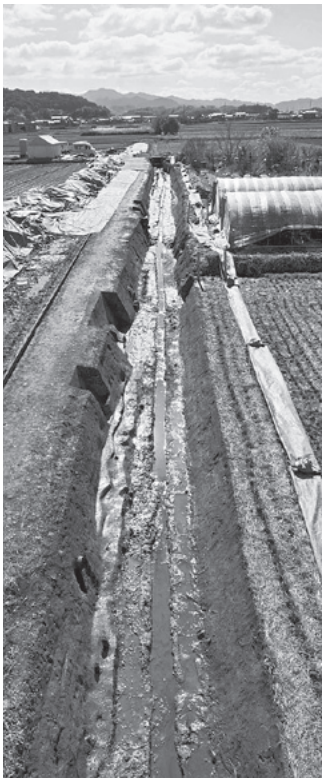
拡張区２東壁土層図　1：60



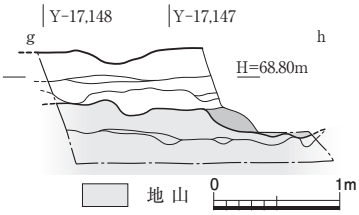
拡張区３遺構図　1：60



SK11138断面図　1：60



北区全景（北から）



拡張区３北壁土層図
1：60

図141　第173-1次調査遺構図・断面図・写真

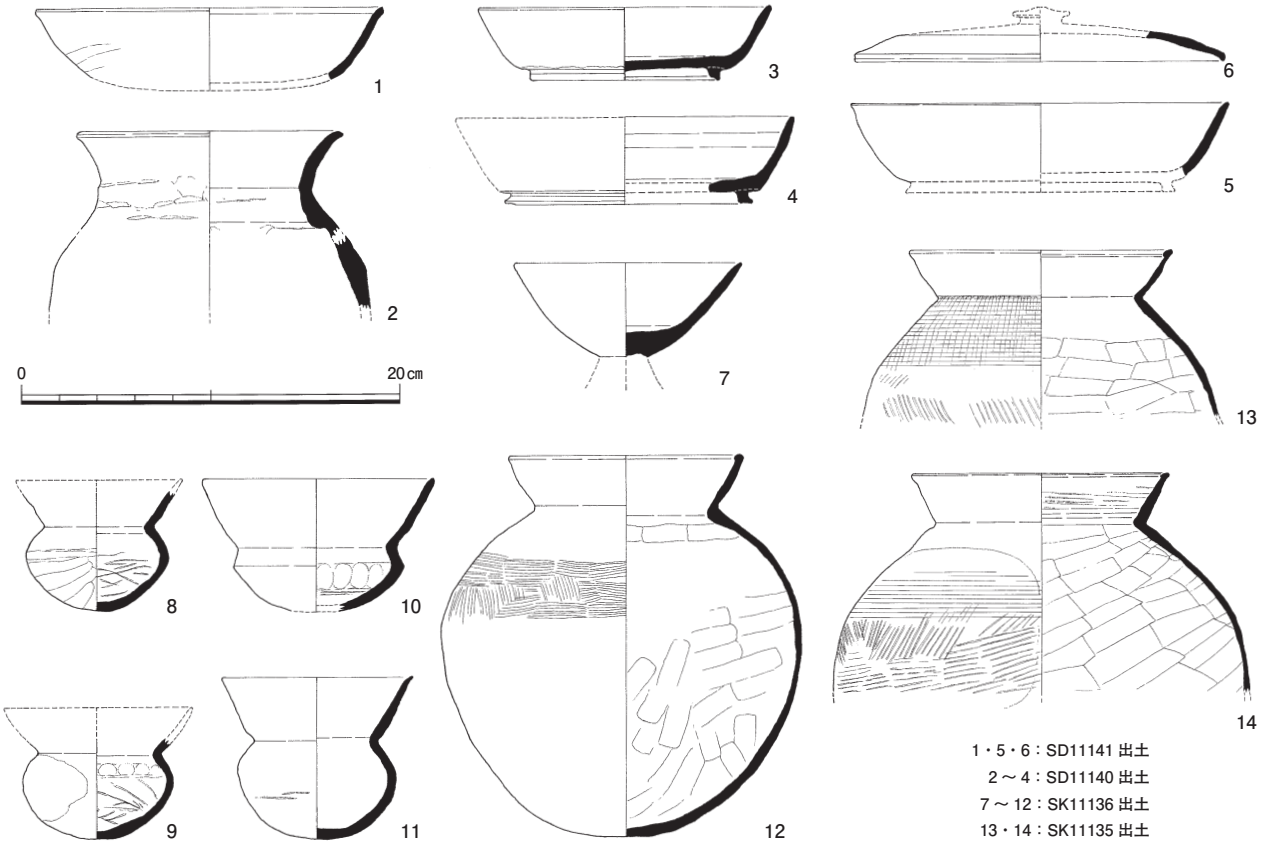


図142　第173-1次調査出土土器　1：4

Ｂである。３は口径15.5㎝、器高3.9㎝、４は口径18.0㎝、残存高4.6㎝、５は口径20.0㎝、残存高3.8㎝である。６は須恵器杯Ｂ蓋である。口径19.6㎝、残存高1.6㎝である。１～６の土器群は藤原宮期に属すると考えられる。

７～12は土坑SK11136から出土した。７は口径12.2㎝の土師器高杯である。脚部は欠損している。８～11は土師器の小型丸底壺である。外面の体部下半にはケズリが施される。12は口径12.4㎝、器高20.3㎝の布留式の土師器甕である。これらは古墳時代前期に属する。

13・14は土坑SK11135 から出土した。古墳時代前期の布留式の土師器甕である。

瓦　類　瓦類は破片が３点出土している。そのうち１点は近世の軒丸瓦である。

その他　土坑SK11135から木片が出土している。土坑SK11136からは長辺34㎝、短辺25㎝、厚さ10㎝、重さ18㎏の平面長方形の台石のような形状をした石材が出土している。上下面・小口面は磨かれて平滑になっており、何らかの用途に使用された可能性もある。

４　まとめ

本調査では一連と考えられる南北溝２条、土坑４基の遺構を確認することができた。

先述したように、藤原京東二坊大路東側溝の推定位置が本調査区内に想定されること、南北溝SD11140とSD11141の埋土から古代の遺物が出土していることより、今回検出した南北溝は、東二坊大路東側溝の可能性がある。また、本調査区には二条大路想定位置に該当する箇所がある。北側溝推定位置は削平により調査区壁面での観察は不可能であった。南側溝推定位置では、調査区西壁で観察が可能であったが、東西溝は検出していない。このことから、二条大路南側溝は、東二坊大路を横断しない可能性が高いという知見を得ることができた。

土坑SK11135は、底は未検出であるが、断面形状から、井戸の可能性もあろう。出土遺物から古墳時代前期の土坑とみられるSK11136～ SK11138は、離れた場所に位置することや、調査区が狭長であることにより、遺構の平面的な広がりを十分に確認することはできなかったが、当該期に調査区周辺で土地利用があったことはあきらかとなった。

本調査区は現代の水路による攪乱や狭長な調査区という制約があったものの、古代および古墳時代の遺構をいくつか確認することができた。特に、一連のものと考えられる南北溝を検出し、それが藤原京東二坊大路の東側溝と考えられることから、京の条坊復原に貴重な情報を得ることができた。また、現水路は、多少の振れがあるものの、ほぼ南北方向に直線的に流れており、条里の境にあたる。このことから、東二坊大路東側溝を踏襲した南北溝が古代以降、近現代に至るまで、やや位置を変えながらも使用されていた可能性があろう。

（木村理恵／枚方市文化財研究調査会）